

### 231. 3年間の“振り返り”

事業統括部 調査役（土木・建築） 黒田 充

「下水道よもやま話」の直近の執筆は219号（令和3年10月配信）とのことで、久しぶりの執筆になります。私自身はといいますと、令和3年10月時点では技術戦略部に所属していましたが、現在は（組織再編により、役職名は変わらないままで）事業統括部に所属変更となっています。現所属では初めての執筆になります。

今年度の「下水道よもやま話」執筆者の中では唯一の出向者であり、日本下水道事業団での勤務が約3年になりますので、ここで少しその3年を振り返ってみたいと思います。なお、「振り返り」という言葉を検索しますと、「自分の行動や言動、内面の傾向を振り返り、改善点を見つけ出すこと」といった定義のようなものが出てきます。ここではそのような立派な「振り返り」ではなく、出向者としてこの3年を思い返してみたいという、回想録のような軽めの話ですので、気軽に読んでいただければ幸いです。

思い返せば・・・当事業団に出向した（採用された）のは令和2年4月。初めての出向で、もちろん初めての当事業団での勤務・・・と初めて尽くしの不安な状態で4月1日を迎えたことを覚えています。少々不慣れな下水道事業に携わることから、ある意味においてフレッシュな気持ちでもいました。ところが、着任して1週間もしないうちに、新型コロナウイルス感染症（以下「新型コロナ」という。）拡大による緊急事態宣言が発令され、日本全体の社会環境が一変しました。

これにより、勤務形態が原則在宅勤務となり、勤務時間以外を含め、ほとんどを家の中で過ごすといった日々が続きました。これほど長期間、入社せずに働く・・・というのは就職して初めての経験でした。勝手が分からない当事業団の業務に早く慣れなければと思いつつも、周りの人（職員）と顔を合わせることもなく、手探り状態で仕事をやっていたといえますか、よく分からないままに時間が過ぎていった感じでもありました。このような先が見通せない感じはストレスではありましたが、上司をはじめとした周りの方々のフォローのおかげで、何とか過ごすことができたのではないかと考えています。

特に、出向1年目である令和2年度は、緊急事態宣言が解除され、出社できるようになっても、在宅勤務との併用で出社はできる限り控えるといった雰囲気（社会情勢）でしたし、出張（特に県境を越えるもの）も控える・・・ということだったと記憶しています。当事業団に出向して下水道（施設）というものに直接触れることができる貴重な機会であったにもかかわらず、家の中と湯島のビル（当事業団の本社執務室）の中から出ることができず、ややもどかしさも感じていました。

そのように考えると、新型コロナ前のようにはいかないものの、現在は出社や出張もあま

り制限されておらず、3年でこれほど勤務形態が変わるというのも稀有な経験であったように思います。昨今のように相対的に出社が増えると、在宅勤務が懐かしく感じることもあります。ただ、緊急事態宣言中に戻りたいということではありませんので。

考えてみると、緊急事態宣言が発令されて速やかに在宅勤務に移行できたのは、このような事態を予測してのことかどうかは別にして当事業団として基盤が整備されていた（準備されていた）ということであり、多様な勤務形態にも対応しやすい、恵まれた職場環境であることを強く感じます。結果論になりますが、よい時期に当事業団に出向できたのかなとも思います。

さて、振り返って思い出す2点目としまして・・・当事業団は、出向者の割合が多い（約3割）というのも特徴のひとつとなっています。出向元も、国や地方公共団体など多様であり、下水道に関して様々な立場や経験をされている方が活躍されています。日々の仕事をする中で、折に触れ、様々な経験談や考え方を聞けるというのはよい刺激でした。同一の組織で長く勤務すると、そこでの仕事の進め方や考え方が正しいと固定化されてしまう懸念があります。当事業団への出向はそのような「固定化」を防除するよい機会であったように思います。

私の担当業務である「下水道事業における土木・建築基準」に関していいますと、出向されている方から（出向元である）地方公共団体ではこのような考え方でやっている（運用している）とか、様々な視点での意見を聞くことができ、それを参考に基準類をブラッシュアップしてきました（してきたつもりです。）。また、基準類はそのままにしておくと、制定や改定（規定の追加）により膨大化していく傾向にあると思われるところ、（出向者等による）外部的な視点により、廃止を含めた「基準類のスリム化（断捨離）」といいますか、「基準類の新陳代謝」もしてきました（してきたつもりです。）。

私自身、基準類が如何にあるべきかについて明確な回答は持ち合わせておらず、基準類として何が正しいのかについて日々考えながら進めてきた感じです。ややもすると、出向元でのやり方を正と考えて進めがちですが、そこは出向者が多いという当事業団の特徴を活かし、できる限り意見・生の声を聞きつつ判断するように努めたつもりです（断言できないため、ここでは「努めたつもり」としておきます。）。

3年間を振り返るときりがないないのですが・・・新型コロナに始まり、これに振り回されたというのが実感に近いと思います。新型コロナの感染症法上の位置づけが本年5月に5類に引き下げられるなど、社会も大きく変わっていくことと思われまます。これまで制限されていたことも（遠慮なく）できるようになることなどが期待され、この3年間を踏まえてといいますか、反動として来年度以降は当事業団でも新たな展開が待ち受けているように感じます。当事業団の一員として新たな展開に期待が高まりますし、仮に異動となったとしても、応援団の一人として当事業団の動きを注視していきたいと思えます。

最後に話は変わりますが、当事業団は令和4年11月に創立50周年を迎えました。下水道（事業）を知るには、国土交通省HPなど参考になるものが多々ある中、創立50周年を記念して、当事業団のHP（～JS 50年のあゆみ～）や季刊誌（水すまし）などでこの50年の“振り返り”（及び今後の展開）が掲載されています。下水道（事業）の歴史などが分かるものとなっていますので、是非、こちらの“振り返り”もご覧ください。私の“振り返り”と異なり、50年という長期にわたる、重みと格調高いものです。